
まじりあう色

いおすけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まじりあう色

【著者名】

NZマーク

【作者名】 いおすけ

【あらすじ】

ある日、空き巣の深見が忍び込んだ家には、魔法使いが住んでいた。脱出できるのか出来ないのがどっちなんだ？

プロローグ

「」は、世界観を語るスペース。
なるべくややこしく、分かりづらく書いてみる。
だから、飛ばして結構です。

あ、いや上から目線で言つてゐるのではなくて、ほんとに分かりづらいから。

読解力を試そうとか、そういうことぢやないです、マジで。

といつわけで、始まりはじまり。

そこに在つて、形なきもの。

地上に、宇宙に、そして身の中に。

それは、満ちあふれて、全ての物に宿る。

人はそれを魂と呼んだ、命と呼ぶ者もいる。

氣まぐれに形を持ち、色を持ったそれを、神と崇める者もあつた。

遠い昔、神は常に人々の傍らにあつた。

人々は、神を恐れ、敬い、そこにあるものとして受け入れた。

日々の日常に神を感じ、語らい、時にその姿を垣間見た。

ある者は、それを龍に例えた、またある者は、それを鬼に例えた。やがて時は流れ、人はその感覚を少しずつ失う、神は遠いものになつていつた。

今となつては、神を見る術はない、ただ先人の残した書に、歌に、絵にその姿を見つけるだけである。

しかしそこから、眞実の姿を垣間見る者はいないだらう。
積み重ねられた歴史は、受け手の感覚をも変化させた。

同じ絵を見たとして、同じ歌を聞いたとして、同じ文章に触れたとして。

大昔の手法では、伝わらないことの方が多かったのである。

午後の爽やかな風が、青空に一つだけ取り残された雲をさらつた。時代は変わつても、この青空が変わらないと感じるのは何故だらう、同じ形の雲など一つと無いのに。

それでも、時は流れる、感じる心の形を、少しずつ変えながら。それは進化なのだろうか、それとも・・・・。

ね、わかんないでしょ？

でも、もしも伝わったのなら、あなたは読み手の才能があるのかもしない。

いずれ、力ある文章に出合つたときせいか一報ください。

怪盗、深見慎也

閑静な高級住宅街、この辺りに家を建てる事は、成功の証と言われている。

立ち並ぶ家は、その大きさ、豪華さを競つて、ひしめいていた。ようするに、金持ちの住む町である。

そしてここは、やたらその中心部。この辺りまでくると、景色がガラリと変わる。

成金の立ち入る隙はなくなつて、古めかしい大きな屋敷が立ち並んでいる。

普通に暮らす庶民には、一生縁のない町だろう。もしもあるとしたら、テレビの前で豪邸特集を眺めるくらいだ。

そのとき感じるのは、羨望か、はたまた嫉妬か。

いずれにせよ、CMをほさんで次のコーナーが始まれば忘れてしまう程度の感動だ。

だがしかし、羨望や嫉妬で終わらせる事が出来なかつた男がここにいた。

深見 慎也（37）、最近、売り出し中の泥棒である。

小学校の卒業アルバムに書いた、将来の夢がルパン3世だった事は言つまでもない。

深見は、5年前まで平凡なサラリーマンだった。

サラリーマン時代の彼を一言で表そうとするならば、最大限に良く言つて、「あまりパツとしない男」になるだろつ。

当時の同僚に、彼の印象を聞けば、きっとこう答えるに違ひない。

「深見？そんなやつ居たっけ？」

表の世界では欠点でも、裏に回ればそれは才能となることがある、人間なにかしら取り柄があるものだ。

深見はその影の薄さを最大に生かして、裏の世界で成功を収めたのだった。

そんなんある日、深見がなんとなくテレビのチャンネルを変えていると、レポーターの大げさな叫びが耳に飛び込んできた。

「すばらしくーー！」これはまた品があるというか、豪華というか。お高いんでしょ？」

しばらく、その番組を見ているうちに、深見の次のターゲットは決まった。

今までの小さな仕事とは、比べ物にならない興奮が彼をつつんだ。

- - - - それから1ヶ月後 - - -

午後の太陽が、春のやさしい日差しを送っている。最高の洗濯日和だ。

いや、こんな日は、家にいるのはもったいないかもしね。お散歩日和でもいいだろう、買い物に出かけてもいいかもしね。レジャーには少し遅い時間だし、一人で行くのも、どうかと思う。パチンコ？それは天気関係ないだろ？

まあ、とにかく、いい天気だった。

深見が忍び込んだ家は、この辺りでも特に大きな屋敷だった。この日のために彼は、いつもよりも多くの準備期間をついやした。張り込みから始めて、人の出入り、家族構成、防犯体制、ゴミを漁つて支出状況まで確認済みだ。

「この家の家主は、古美術の売買を生業にしているらしい。買い付けの業者が入つていくのを、何度も目撃している。何を売つていたのかまでは分からなかつたが、相当な額であつたのは確かだ。

物々しい警備と、手錠付のアタッシュケースが何よりの証拠だつた。収入は莫大で、支出はほとんどない。

家族は年寄りと中学生の一人で、昨日から出かけている。今日の夕方までは帰つてこない。

番犬なし、番トラも番ライオンもない。

調査結果の全ては、この家が最高のカモだと告げていた。

「ええっ…うそだろ~、もうかんべんしてくれよ。」

深見は、天を仰いで言った。

視線の先には、地面に置かれた片方の靴。
さきほど、田印にする為に深見が置いたものである。

「くそ、ありえない。たしかに広い敷地だつたが、一周するのに20分もかかるなかつたぞ? ただ広いだけで、防犯カメラもない家だから入つたのに。」

「」
ひとせらり説明口調でそう言つと、深見はその場に座り込んでしまつた。

言わずに居られなかつたのである、彼は、自分の正氣を疑い始めていたのだった。

深見が異変に気づいたのは、忍び込んでから10分ほど経過した頃であった。

そしていま、12時間が経過しようとしている。

12時間も何をやつていたのかと思うかもしれない、もつともなご

意見だ。

しかし深見にそれを言つのは、かわいそうだらう。彼には、どうしようもなかつたのである。

「俺は確かに進んでるよな？タベから一睡もしないで歩いてるよな？なんで近づくことも、逃げることもできないんだ…さつき置いた靴が、進行方向から現れるなんてどうなつてんだよ・・・。」

深見は後悔していた、テレビで白糖していた奴に痛い目を見せるつもりが、欲をかいてしまつたのである。防犯カメラが5メートル置きに配置されている家よりも、こっちの方が安全に思えたのも事実であった。

「神様、仏様！…どうか、どうか助けてください。今まで信心なんて全然してこなかつたけど、これからはちゃんとします。そうだ！もう悪いことは辞めます。」この家業からも足を洗います。だから、おねがい助けて。」

その声に答えたのは、大地を震わせる年老いた神の声ではなく、一下子抜けするほど軽い口調の若い声だった。

「ほんにちゅは、この家にお客さんとは珍しいですね。道にでも迷いましたか？」

突然の声に驚いた深見は、声の主を探して辺りを見回した。

「だ、だれだ？どこにいる？神か、神様なのか？誰でもいいから助けてくれ。」

「困った時の神頼みですか。でも、タダで願いをかなえてもらおう

と言つのは、虫が良すぎませんか？まあ、有り金はたけば助けてくれるとは限りませんけどね。」

声はすれども姿は見えず。深見の目に映るのは、もう1-2時間も歩き続けて見飽きてしまった風景だけだった。

ほんの数メートル先にある、3つの蔵と右手に見える母屋。それは、昨夜から変わらずにそこについた。

人影はない、そこに居るのは自分だけだった。

不安で身を硬くする深見の視野に、その時、突然人の右手が現れた。

「残念ながら僕は神様じゃありませんよ、神保一といいます、よろしく。」

差し出された手から反射的に身を離す。深見が見上げる先には忽然と現れた高校生の姿があつた。

背が高い、190センチ近いのではないだろうか。その体に無駄な肉はなく、モデルといわれても誰も疑わないだろう。

紺のブレザーの制服に身を包んだ彼は、神が気まぐれに生み出した美を独り占めしたようなオーラを放っていた。

・・といえば大げさだが、それに近い程度に美男子だった。

ハジメは、なおも右手を差し出し、人懐っこい笑顔で握手を求めていた。

「神様じゃないけど、助けてあげますよ。目的は同じみたいですし、まあ立つてください。」

深見は、あっけに取られたままその手を取つた。

手から伝わる暖かい波動が体の中心へと伝わっていく。

理解不能の出来事の中で、思考停止寸前の脳みそが、ゆっくりと活動を再開する。

深見は思つた。こいつ、人間じゃない。・・。

それは、思考ではなく直感であつた、今まで、幾度となく深見を救つた直感がそう告げていたのだ。

笑う魔魔

古来より、人は文字に願いを込めて、大切なものを守る習慣がある。

おフダやお守りなどとして、今もそれは広く残っている。

家内安全、商売繁盛、安産祈願、合格祈願、悪霊退散、喧嘩上等、

駐車禁止、五目炒飯。

後半はちょっと間違っているが、かつては今よりも強力な効果を持つていた。

文字の力によって、形だけではなく数々の奇跡を起こすことができたのである。

今となつては、その術を伝えるものは数少ない。

力ある文章を、力ある文字にする者を、人は書き手とよんだ。

「さあ、目を開けてみてください。大きな声を出さないようにしてくださいね。」

ハジメの言葉で、深見はゆっくりと目を開けた。

人は、本当に驚いた時には声を失うものだ、でも、さらに度肝を抜かれたら黙つていられるだろうか？

精神の崩壊を防ぐ為に、自然と叫び声が上るのは、心のセーフティーロックともいえよう。

「セーフティーバーを下げるのは私の仕事」

これは、世界一有名なネズミがいる遊園地の、アトラクションで聞くことが出来る台詞だ。

しかし「」では、まったく関係がない。じゃあ言つな？・・・「」もつとも。

「『わやあ、なんだこりゃ？！た、たすけてーーー！』

「はは、深見さん落ち着いてください。この子達には、害を及ぼす力はありませんよ。大声を出すと、もつとタチの悪いのが来てしますから、どうかおしずかに。」

深見の額には、一枚のおフダが貼り付けられていた。

近づいてよくよく見れば、隙間なく、細かい文字がびっしりと書き込まれているのが分かるだろう。

深見はハジメになだめられて、次第に平常心を取り戻していった。最初警戒していた深見も、ハジメの不思議な雰囲気に、今ではすっかり気を許している。

深見はこのとき、その事にまったく疑問を抱かなかつたが、後日友人にこいつ語つていてる。

「魔法使いつていると思うか？思わないよな？俺もいないと思つ。でもな、悪魔はいるんだぜ。笑顔一つで警戒心をとかしちまうんだ。あとはもつ、悪魔の言いなりさ。悪魔と契約した男の話しなんて、デッチ上げだと俺はおもうね。あの笑顔にやられたら、交渉なんてできっこない。思い出しただけで身の毛がよだつ、怖くてじやないぜ。怖いんじゃなくともう一度会いたくなつちまうんだ。悪魔つてのは、とびっきりいい男の姿で笑うんだ。」

深見にとって、この悪魔との出会いが、その後の人生を大きく変える事になつたのは紛れもない事実であった。

それはまた、別のお話として、語られることがあるかもしないし、ないかもしない。

「深見さん、あの大きめの石が見えますか？あそこに書いてある呪文がこの子達を操っているんですよ。あなたが進むのにあわせてこの子達が動いて邪魔する仕掛けですね。幻覚効果もあるようです、これのせいで同じところをぐるぐる回っていたんですね。」

「呪文だと？それとこれと、どう関係があるっていつんだ。」

深見の言つことは、足元のコレである。

深見とハジメの足元には、くるぶしまで伸びるピンクの毛がまとわりついていた。

長い毛は、ハジメの指し示した石を中心に広がって、細かくつむぎでいる。

それはまさに、ピンクの絨毯。それも、長くて細い毛が編み上げられた逸品だ。

しかもこの色、目がチカチカするショックングピンクには、高級感のかけらもない。

総合評価は、「ゴミだ、粗大ゴミだ。」処分の際には印紙を忘れずに

であった。

「さて、この窮地を脱するにはどうするか。そうですね、あの文字を破壊するのも手ですけど、たいていこの手の罫にはオマケがついていますからね。文字を破壊した者に災いをつて感じですね。試しにやってみますか？」

「災いだと？冗談じゃない！だいたい俺の質問に答えてないぞ、呪文ってなんなんだよ。」

「呪文は呪文ですよ。この家の住人が何者か、知らずに入つたんですか？」

「はあ？」この家の住人は、魔法使いだとでも言つのかよ。」

「ちょっと違いますね、わかりやすく言つと、魔法使いのために呪文を書く人が住んでます。」

「はあ？ 魔法使いなんているわけ無いだろ。本気で言つてるのか？」

「はは、居るわけ無いじゃないですか。例えですよ、言つたでしょ？ 分かりやすく言つとつて。正確には、読み手です。呪文を読んで力を発現させる人のことです。」

「ますます分からん。呪文だの読み手だの、いつたい何の話だ？」

ハジメは少し困ったように顔をしかめると、ポケットから一枚の紙を取り出した。

シワを伸ばして、深見へと差し出す。

「これが、呪文です。読んでみてください。」

深見は、渡された紙片に目を落とし、怒つたよつと言つた。

「・・・ 黄色い綿毛？ 春の木漏れ日つてなんだよ。馬鹿にしてんのか？」

「それは、普通の人には理解できません。でも、読み手と呼ばれる人たちには読めるんです。そこからイメージした事に、精霊たちが反応するんですよ。では、やってみますね」

ハジメは、声に出して呪文を読み始めた。

単純な単語の組み合わせが、詩のように韻を踏んで繰り返されるさ

まは、読経する僧侶にも似ている。

やがて、ハジメの周りを黄色い光が漂い始めた。

それはしだいに光を増して、まばゆいばかりに輝きだす。

「ハ、これは・・・、綺麗だ。」

「ここまでが、精靈の召還のくだりです。ここからが本番ですよ、よく見ていてくださいね。」

ハジメの声の調子が変わる。荒々しく叫ぶその言葉は、前半の分かりにくい言葉ではなく深見にもはつきりと分かる言葉だった。聞き間違えようはずも無い、それはおそらく簡単な命令、「ハカイセヨ」。

ハジメの口から、その言葉が発せられた瞬間、黄色い光はパリパリと音を立てて集まって、ハジメの指差す岩に向かって飛んでいった。

そして、どどろく轟音。爆発の衝撃で、大量の土砂が天高く舞い上がりしていく。

後に残されたのは直径3メートルほどの大きな穴だった、岩は跡形も無く碎け散っている。

焦げ臭い匂いが鼻をつくのは、黒く焦げた穴の淵から立ち上る匂い煙のせいだろう。

「さて、次は蔵へ侵入しましょう。どんな罠が仕掛けにあるのか、ワクワクしますね。」

「・・・・・。」

「そうですか、深見さんもワクワクしますか。それじゃ、お先にどうぞ。この中には、お宝がたくさん詰まってるんですよ。」

ハジメは悪戯っぽい笑顔を浮かべて、深見をいたずらった。

ピンクの絨毯が取り払われた、誕生の上をどんどん歩いていく。

「早くしないと、次のが来ますよ、災いつてやつです。急いでください。」

深見は、大急ぎでハジメを追いかけた。

*

蔵といえば、土壁に瓦が乗っている、和風のものを思い浮かべるのが普通だろう。

重たくて分厚い扉がついていて、古い家などにある建物だ。しかし、ここのは少し違っていた。

遠くから見たときはそう見えたが、近づいてみるとコンクリートで出来た近代的なものだと分かる。
少し離れたところに小さな小屋があつて、太いパイプでつながっている。

「あれは、除湿装置です。中のものを湿気から守っているんですよ。」

「

「俺は倉になんか用は無いんだがな、母屋に入る予定だったんだ。」

「おやおや、欲が無いですね、母屋にある物なんてたかが知れってますよ。プロならリスクに見合つた報酬を得るべきです。違いますか？」

「？」

どこから見ても高校生のハジメに、プロ意識を再確認させられる深見も深見だが、そう言って違和感を感じさせないハジメも普通ではない。

ハジメは深見の手を取つて、蔵の扉へと触れさせる。深見の手が扉の取つ手にかかり、扉がほんの少し動いた時、扉の隙間から突然、黒い塊が飛び出した。

「！」

「深見さん、ファイト！呪文は扉の裏ですよ。開けないと解読できません。がんばってください。」

黒い塊は、深見の体を這い登る。

足元から冷たいゼリーに包まれていく感じだ。ゼリーに包まれた箇所から冷気が浸透して、感覚がなくなつていく。深見は渾身の力を振り絞つて扉を開けた。

「よし、思つたとおりだ。深見さん、疲れ様でした。」

ハジメは、扉の裏に張つてあつたおフダの上に、もう一枚おフダを重ねた。

全身を覆いつくしていた黒いゼリーは、細かい粉になつて舞い落ちて、深見の足元に小さな山を作つた。

「・・・・・だましたな。」

「だますなんて人聞きの悪い、役割分担ですよ。僕が動けなくなつたら、解除できないでしょ？」

深見は何か文句を言つたが、それは言葉にならず。

言つた相手といえど、もつすでに蔵の中へ姿を消していた。

「深見の全身に虚脱感が広がる。」

深見は思った、「俺死ぬよな?」のままだと次死ぬよな? 次死ななくとも、その次は怪しいよな?

「深見やーん、早く来てください。お宝の山ですよ、早く、早くー。」

蔵の中からハジメの声がする。ビックリでも拍子抜けする軽い口調だ。

深見は、ノソリと歩き出した。黒い粉に深見の足跡が残る。

深見はこの時初めて、自分が片方の靴を失っていることに気づいた。

振り返れば、ぽっかりと空いた地面の穴。そのまま近くに自分の靴が落ちている。

深見はそこに、靴と一緒に大事なものを置き忘れた気がした。それは、平凡な日常だろうか、「こくまつ」という常識だろうか。いずれにせよ、もう引き返すことはできない。

深いため息を一つ吐き出すと、深見は蔵の中へ入つていった。

フェイスレス

『呪文』。呪いの文章と書いて呪文である。まじないの文句として有名なその言葉は、突き詰めると呪いを発揮する文章である。

さて、まじない師の呪いで有名なものを上げてみよう。

- ・王子様を蛙に変化。
- ・お姫様を覚めない眠りに落とす。
- ・パーティのＨＰを回復。
- ・炎を召還して敵を焼き払う。

後半はゲームの中の呪文であるが、数ある呪いの中で、一番タチが悪いのはどれだろう?

即座に命を奪う死の呪文?それとも、地獄の苦痛を与える呪文?いや、もつと恐ろしいものがある。

そう、人魚姫が掛けられた、あの呪いである。

声を奪つておいて、王子様と結婚出来なかつたら海の泡になつて死んでしまう。

条件付の一一段がまえの呪いだ。まさに超高等呪文といえよう。この呪文の怖いところは、自分に何が起こっているのか充分に理解したうえで、選択の余地が無いところだ。

愛しければ愛しいほど、深みへ墮ちていく、まさにアリ地獄。恋のアリ地獄だ、・・・・あれ?なんか響きが良いぞ?言われて見れば、恋は墮ちるもので昇るものではない。

恋の苦しみにもだえ苦しみながら、まつ逆さまに墮ちて行く恋。

人魚姫は最後に、こう言ったに違いない。

「あなたの為ならこの命、惜しくなどありません。あなたの幸せだけが、私の生きた証です。さよなら、そして、ありがとう。」

恋する気持ちに手足を縛られ、その重みでビームでも、ビームでも墮ちて行く。

命がけの一途な恋、・・・素敵だ。

あなたは素敵な恋、してますか？

深見が、イヤイヤ足を踏み入れた蔵。その中の光景はといつと、本、本、そして本であった。

本棚にぎっしりと詰まった本から放たれる、埃とインクの匂いが鼻をついた。

それにしてもデカイ本棚だ、普段~~日~~にする家庭用の本棚ではない。それが何列にも連なって、遙か彼方まで続いている。

深見の半生において、図書館というものは縁の薄い施設だったが、市立図書館ぐらいは行つたことがある。

なにをしに行つたのかといえば、「涼みに」である。

学校をサボったはいいが、とくに行くところも無かつた若かりし日の深見は、図書館で時間を潰したことがある。

夏の図書館は、クーラーが利き過ぎていて風邪をひいた。それ以来、一度も行つていない。

しかしここは、市立図書館よりも暖かい・・・ではなくて、本が多い。圧倒的な質量でもつて侵入者を威圧しているようだ。

「深見さん、おフダに氣をつけてくださいね、書いてある呪文によつては、触ると即死つていうのもありますからね。」

ハジメは、物騒なことを平然と言つてのけると、再び本棚を覗き込んだ。

もう、深見のことなど眼中にないようだ。

- いつたい何を探しているのだろう？ -

深見は不思議に思った。ハジメはお宝の山だと言つたが、ここにこそ

れらしい物は見当たらない。

目に映るのは、本ばかり。それに良く見ると、本とこうよつはレストランのメニューと言つた方が近い。

高級な革張りの表紙がついているが、どれも薄くて軽そうだ。

- まさか、この本がお宝だとも言つのか？ -

古書の類がコレクターの間で、しばしば高値で取引される」とは深見も知つてゐるが、ここにあるものはそれほど古くものではない。

「深見さん、足元にも氣をつけてくださいね。」

振り返りもせずにそのままハジメを、ため息交じりに見つめる深見。

これは、存在感というのだろうか、こんなに薄暗い部屋の中でも、ハジメの姿だけくつきつときつと浮かび上がっている。

本棚の中を覗き込む仕草さえ、さまになつていて、絵になるとこゝうか、まるでドラマのワンシーンのようだ。

見るものの視線を引き付けずに置かない何か……そへ、華がある。深見の視線に気づいたのだろうか、振り返ったハジメはこいつと笑つて言つた。

「どうしました? はやく、自分の分をお決めになつてしまいかがですか。」

「そんなこと言つたつて、お宝などないあるんだよ……。」

「ここにある呪文は、どれも高価なものですよ。一番安いものでも、高級車が一台買えるほどです。」

「これ全部、あの物騒なやつなのか!」

「物騒なんてもんじやありません、先ほど僕が使つたのとはランクが違いますからね。神瀬の書は、兵器に近いですよ。」

「兵器……。」

深見の視線が、行儀よく並ぶ背表紙に釘付けになる。

ここにある呪文が一斉に使われたら、世界はどうなってしまうのだろ？

深見の手が、恐る恐る一冊の本に伸びていった。

「お、いい所に田を付けましたね。それは、初心者でも読みやすいのでお勧めですよ。他のに比べて、すこし値は下がりますけどね。」

いつの間に移動したのか、ハジメがすぐ後ろに立っていた。

突然、後ろから声を掛けられて驚いた深見は、たたらを踏んで、その手が触れてはいけないものに触れてしまった。

それは、巧妙な罠か、それとも偶然のいたずらか。いずれにせよ、キッカケを作つた悪魔は腹を抱えて笑つていた。

「同じ罠に、2回も掛からないで下さりよ。そのおフダは、魂を吸い取る呪文が書かれているんですから、そんなに何度もかかつたら・・・あれ？」

深見は、一度田の抱擁に身を硬くしていた。

ハジメはといえば、まるで呪文を無くした読み手のような顔をしている。

「おかしいなあ、どこの落としたんだろう？·そつかー読み手向けの罠か、これはうかつでした。」

深見の不安が危険水域を突破して、今にもあふれそうだ。
しみこむ冷氣に、ガチガチと鳴り止まない奥歯、やがて訪れた暗黒。

「真っ暗だ。目が、目が見えないと。助けてくれ。」

「暗くなつたのでは無くて、元々暗いんですよ。僕が呪文で召還した精靈のおかげで、見えていたと言う訳です。魂と精靈は、器に入つてゐるか入つていなかの違いで、同じもので出来ています。ですから、さつき僕が召還した精靈が飲みこまれてしまつたんですね。」

「説明はいらん!とにかく、なんとかしてくれ。」

深見の手に、ハジメの手が重ねられた。

その手は、燃えるように熱く、力強い。

深見の耳に、ハジメの声が聞こえた。

その声は、小さな声であった。

人の声帯が出す事の出来る、限界まで抑えられた、さそやき。ハジメの息づかいが、だんだん荒くなつていく。

「この手は使いたくなかったんですが、仕方ありません。深見さん、短いお付き合いでしたが、ありがとうございました。」

「なにする気だ!殺す気か?やめろーー!」

真っ暗な部屋の中に浮かぶ一つの光点。

内から溢れる力が、行き場を失つて漏れ出すよつて、ゴクゴクと立ち上る白い炎が二つ。

恐怖に見開かれた深見の目に、最後に映つたのはハジメの両眼であった。

薄れ行く意識の中、聞こえるのは、歡喜に震える獣の咆哮だったのだろうか。

すくなくとも、深見にはそう聞こえたのだった。

*

深見が再び田を開いた時、最初に田に飛び込んできたのは真っ白い天井だった。

「嫌な夢を見た……。」

一人そつまいて辺りを見回す。どうやら今のは病室のようだ。左腕に刺さった点滴の針を引き抜いて、一つしかない窓へと歩き出す。窓から見上げる空は、月も無く真っ暗で、今までに見たことも無いほど無数の星が瞬いていた。
何がおかしい、山奥ならござ知らず、星が良く見えすぎる。深見の頭の中にハジメの声が聞こえた。

「僕が呪文で召還した精霊のおかげで、見えていたと言つ誤です。」

田を凝らすと、空氣中に漂う細かい光の粒が見える。コップの中の細かい気泡のように、風に乗って漂っていた。

深見は恐る恐る額に手をやつた。

「そんな訳、無いよな。」

深見は安心した反面、少し残念そうに額をさする。

そのとき、一台の車が病院の駐車場に入ってくるのが見えた。ツー

トンカバーの車体に神奈川県警の文字。パトカーだった。

病室に足を踏み入れた刑事の田の前には、もつすでに深見の姿は無かった。

開け放たれた窓と空っぽのベッドだけが、深見の逃亡を証言しているようだ。

「では、ijiに運び込まれた男性の身元は分からないと？」

「はい、身分証の類は持つていませんでした。ただ、これを額に・・・」

ナースステーションの前、看護士が刑事に差し出したのは、一枚のおフダであった。

「なるほど、では特徴を教えてください。」

「それが・・・。」

看護士は、ナースステーションを振り返る。

中で聞き耳を立てていた同僚たちが、微妙な顔つきで首を横に振る。

「覚えてない？そんな馬鹿な。誰も覚えてないんですか？」

「はい、たぶん、もう一度会っても分からないと思います。あたしたちも気味が悪くて・・・。」

「の出来事は、看護士たちの間で長く語り継がれることになる。うわを話しに尾ひれがつくのは、どこの世界でも同じである。」

その日、近所で起こった爆発事故の犠牲者の幽霊だとか、爆発事故はHFTOの墜落によるもので、運び込まれたのは宇宙人だとか。なかには、性病に感染した超VIPで、当時の担当者が口止めされていたと言つてゐた。

語り伝える者は、好き勝手に想像力の翼を広げて次々と新しい説を発表する。

そのなかで一番突飛だったのは、魔法使いに呪いを掛けられた男だという説だろう。

悪い魔法使いに呪いを掛けられた男は、誰の記憶に残ることもなく、今日も町の雑踏に紛れ込んで暮らしている・・・。

いづれも、何の根拠も無い勝手な言い草であつた。

それはまるで都市伝説のように、今夜も語り継がれていく。

・・・と言つわけで、一応言つておく。

信じるか、信じないかは、あなた次第です・・・と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8183c/>

まじりあう色

2010年12月14日13時46分発行